という本書のアプローチは、アラブの春以前の研究動向に対する見直しにも資すると考えられる。アラブの春以前、特に 2000 年代に盛んとなった、権威主義体制の頑健性に着目するアプローチは、権威主義体制の安定性を過大視し、権威主義体制のもとで進んでいた、体制と軍部との関係性の動態的変化や、新自由主義経済政策の導入が国家に与えた様々な影響を看過してきた。。このような観点はまさに本書の歴史的なアプローチによって把握しうる観点である。アラブの春を評価するためには、本書の提示する 1990 年代以降の中東地域システムの「再編」を、権威主義という外観にとらわれず、その構造から解き明かすことが求められているのである。

最後に、評者の立場から本書を含めた中東政治研究全般の抱える問題を指摘したい。本書は中東諸国における近代国家の誕生と定着という枠組みから 20 世紀～現代の中東諸国史を描出しているが、そこでは、なぜ中東地域に未だに多くの君主制国家が残存しているのか、という問いへの検討が行われていない。現在でも（アラブ首長国連邦を 1 ヶ国として数えた場合）8 ヶ国もの君主制国家が中東地域に存在しており、これは本書の定義する現代中東諸国 23 ヶ国のおよそ 3 分の 1 にあたる。これほど多くの割合の君主制国家が残る地域はヨーロッパ以外には見られない。ヨーロッパでは、近代国家誕生のプロセスで君主が政治的権力を議院内閣制に譲り渡す、あるいは、第一次世界大戦及び第二次世界大戦での敗北によって国民からの信任を失い、共和制へ移行するというプロセスとして、近代以降の君主制を巡る議論が行われている。それに対して、中東地域に関しては、本書のように権威主義体制一般の議論を当てはめるか、ヨーロッパでの君主制の経験に立脚して君主制の取るべき経路が論じられるという場合がほとんどである。しかし、中東地域における君主制諸国のプレゼンスの大きさを考慮するならば、共和制と同様の議論を行ったり、他地域の経験を一般化しようとするのではなく、中東地域の君主制そのものに焦点を当て、その政治的展開のメカニズムを解明する必要がある。これは本書に限らず今日までの中東政治研究全般が抱える課題であり、これを相克するための創造的研究が今日求められていると言えるだろう。

総じて言えば、このような優れた作品が日本語に翻訳され、日本語を母語とする読者の手の届くところに到来したことは非常に喜ばしい。一人でも多くの読者が本書を手にとり、中東政治への理解を深めることとなることを期待したい。

＜参照文献＞

酒井啓子（編）2012『中東政治学』有斐閣.

末近浩太（編）2008『現代中東政治学リーディングガイド』(CIAS Discussion Paper No. 6）京都大学地域研究統合情報センター.

松本弘（編）2011『中東・イスラーム諸国　民主化ハンドブック』明石書店.

（渡邊　駿　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

細田尚美（編著）『湾岸アラブ諸国の移民労働者――「多外国人国家」の出現と生活実態』明石書店　2014 年　297 頁

「人の移動の時代」と言われるほどに国際的な人の移動が盛んである。移動の背景には、主に自然資源の持続的（循環的）な利用、リスクの回避、新たな生計戦略の創出などがある。移民研究や難民研究、ディアスポラ研究の観点から国際的な人の移動を分析することは、今日的な社会的要請と学術的な課題に合致しているであろう。しかし、これまでの移民研究は、主な研究対象としてカナダやオーストラリアなどに焦点を当ててきた。湾岸アラブ諸国が考察されることは少なく、本書はその点で画期的な意義を持っている。

本書は、題名を見ると湾岸アラブ諸国の研究の著作のように見えるが、移民の送り手側であるフィリピンの専門家である編者をはじめ、アジアや中東を専門とする多くの若手研究者が力を結集した作品である。6 年間に及ぶ共同プロジェクトの成果が盛り込まれており、目を開かれる叙述に満ちている。本書は、湾岸アラブ諸国で暮らす移民労働者の社会空間、その社会内において展開される当該国の国民と移民労働者との共

存のあり方などを明らかにすることを目的として、アラブ首長国連邦（UAE）、オマーン、カタル、クウェート、サウディアラビア、バハレーンの6カ国を対象としている。

全体として2部8章で構成されており、第1部では、湾岸アラブ諸国が多数の移民労働者を受け入れるに至った背景や労働者に対して設けられた制度、移民労働者と共存する社会構造などを扱っている。国民がマイノリティである湾岸諸国にとって移民労働者は欠かすことのできないが、一方で移民労働者とホスト社会との間に分断が生じていることも事実である。この分断の事実を分析するために、第1、2章では移民の管理と移民により生じる問題への対処法について、第3、4章では分断状況の実態を示す事例として、女性移民労働者とその雇用関係について取り上げている。

第2部では、アジア系労働者の生活世界に焦点を当て、彼らの間にみられる生活再建のための実践やネットワークとコミュニティの形成やその再編について検討している。なかでも注目すべき点は、執筆者たちがフィールドワークをもとに事例を描き、移民労働者相互の関係性や同じ国から来た移民労働者間の関係性をわかりやすく描き出している点である。

以下では、各章の内容を概観する。

第1章（堀抜功二）では、国際労働力移動における湾岸アラブ諸国の位置づけを検討している。本書が対象とする湾岸地域は特殊事例として取り上げられることが多いが、本章は、湾岸地域を特殊事例とみることに反対し、湾岸アラブ諸国の現状をふんだんなデータを用いて明らかにし、国際労働力移動の時代において湾岸地域を一つのモデルとするような視点を提示している。また、湾岸アラブ諸国と他の主要な移民受け入れ国の制度を比較すると、最大の差異はシティズンシップをめぐる点にあることも明らかにしている。

第2章（松尾昌樹）では、増大する移民労働者に対し、湾岸アラブ諸国政府がどのような対応を講じているかについて論じられている。各国にとって、移民労働者を増やすべきか、逆に減らすべきかという根本問題がある。これに対する考え方は国によって大きく異なるが、本章はその違いを「高分業諸国」「低分業諸国」の分類によって説明している。湾岸アラブ諸国では、元来の人口規模が小さい上に石油輸出収入の増大によって国内の経済が非常に活性化し、移民労働者が大量に流入することになった。増大策をとるにしても抑制策をとるにしても、湾岸アラブ諸国にとって移民労働者は必要不可欠な存在であり、彼らの増減はそれぞれの国に根幹的な問題となっている。

第3章（辻上奈美江）では、サウディアラビアにおける家事労働者の流入と国内における「伝統」維持との関係性について論じられている。プライベートな空間における外国人の介入という状況についても焦点が当てられている。女性家事労働者の位置づけは事例によって異なり、家族の一員という認識もあれば、暴力の対象となるような異質な存在という認識もある。さらに、文書を偽造して違法に働く労働者や彼らの逃亡といった事件も後を絶たず、社会問題となっている。

プライベートなケアの空間に外国人が進出したことは、グローバルなケアの拡大の一環と考えられる。社会構造の変化に伴いケアのグローバル化が可能になったことが、家事労働者の流入を支えているのである。それに加えて、宗教的・伝統儀礼を盛大に行うために外国人を行事に動員し、「伝統」の維持をおこなっているという点が興味深い。

第4章（石井正子）では、第3章で触れられている問題に関連して、フィリピン人家事労働者に対する保護の取り組みが考察されている。フィリピンでは国策として170ヶ国以上に移民労働者を送り出しているが、移民に関して最も多く問題が発生するのが湾岸アラブ諸国だという。そのため、労働者の保護の一環として「コロンボ・プロセス」が立ち上げられ、湾岸アラブ諸国も2005年ごろからそれに参加して問題の改善に向け取り組んでいる。クウェートやUAE、サウディアラビアでは家事労働者の雇用契約の整備を進めており、クウェート、バハレーン、UAEでは虐待を受けた女性のためのシェルターを開設している。

一方の送り出し国としては、大きなジレンマを抱えている。移民労働者は移民先で労働を行い、その対価として得た給与から自国に送金する送金ネットワークを保持している。フィリピンの場合、この送金はフィリピン国家にとって外貨獲得の最大の手段である。移民労働者は国や家族を守る「新しい国民的英雄」であるという意識を植え付け、国に対する帰属意識を促して送り出される。その反面、本国への帰属意識が強まる結果として、政府が自分たちに対する保護を怠ったとして、反政府的感情が生まれる政治土壌の形成につながっているという。

第 2 部では、第 5 章（細田尚美）が UAE で働くフィリピン人に焦点を当て、彼らの間に見られる生存戦略や人々のネットワーク、コミュニティを検討している。近年、フィリピン人ディアスポラ・コミュニティについての研究蓄積が厚くなってきたというが、研究対象地域の多くは欧米諸国や東アジア、東南アジアが占めている。湾岸諸国に関する研究は少なく、労働者への虐待に関する研究がほとんどである。

本章ではそのような空白を埋めて、フィリピン人労働者の生活世界に着目して、UAE における外国人労働者に関する制度とその中で彼らが生き抜く戦略、彼らの間に存在する多様なネットワークやコミュニティ、フィリピン人労働者コミュニティの内部における成員間の関係性などが明らかにされている。

彼らの生存は主に「カバヤン・ネットワーク」を通じて維持されている。フィリピン国内での出身地が異なっても、このネットワークの中では互助が期待できる。フィリピン人の約 8 割がカトリックという宗教的な特徴を生かしたコミュニティも存在する。また、ボーン・アゲインといった宗教団体も存在しており、カトリックから改宗する労働者も多くみられる。

その一方で、フィリピン人労働者間の関係性を見ると、同国籍であるといっても階層の違いから就業する職業が異なるなど分断も生じる。それに対して、「アソシエーション」を組織することで他の職に従事する同国籍の人々と交わることが可能となり、UAE 在住のフィリピン人が繋がりあう大きな契機となっている。

第 6 章（松川恭子）では、インドのゴア州出身者が湾岸アラブ諸国において形成するネットワークと彼らの故地との関係が論じられている。そこには、3 つの側面がある。第一に、彼らのネットワーク形成には近年発達している SNS が用いられており、中でも Facebook の使用がインドに住む親族との繋がりの保持に役立っている。第二に、宗教活動を見ると、キリスト教会の活動を通しゴア・クリスチャンの宗教行事の再現により、コミュニティの形成を行っている。第三に、クリスチャンの演劇集団をゴアから移民先に招き、ゴアの社会問題を扱った演劇を鑑賞し、いっしょに劇中歌を歌うことで「ゴア・クリスチャン意識」を強化している。ただし、これはゴア州出身者のみのネットワークであり、他の州の人との交流は見られないようである。その現状を踏まえ、ゴア州からの移民労働者をインド人移民労働者として一括できないと指摘されている。

第 7 章（渡邉暁子）では、UAE とカタルにおけるフィリピン人の改宗を取り上げ、当該国の国民と移民労働者が分断された社会の中で、イスラームへの改宗がどのような新たな関係性につながるのかについて論じられている。湾岸アラブ諸国では、外国人人口の約 3 割をインド人が占めており、それ以外はムスリム国出身者が過半数を構成している。湾岸社会の特徴は、国籍と社会階層に基づくヒエラルキーの存在が移民労働者を分断してきたことである。その上、ムスリムか非ムスリムかといった宗教面、西洋出身なのか非西洋なのかといった文化面もヒエラルキー形成に関わっている。

フィリピン人のイスラームへの改宗は、ホスト社会に参入する重要な契機になる。湾岸アラブ諸国はムスリムの割合が多く、改宗すると労働環境や経済状況が改善される傾向にある。その一方で、フィリピン人同士の宗教上の関係は、食慣行の違いなどからずれが生じてしまう。にもかかわらず、フィリピン人としての団結を求める場合には宗教的な違いはさほど認識されないという。総じて言えば、改宗がそれを契機とするホスト社会との「共生」のコミュニティに結びつくとは必ずしも言えないと結論付けられている。

第 8 章（竹村嘉晃）では、インド・ケーララ州出身者たちの神霊をめぐる行事を介した故地とのつながりについて紹介されている。また、ケーララ州では湾岸アラブ諸国を題材にした映画が制作されており、その影響で移民労働を通じて富を得る「ガルフ・ドリーム」も広く存在している。

これまでの研究では移民労働者の集団としてのアイデンティティや労働者の増大がもたらす社会変容については多く取り上げられているが、労働者の揺れ動く心情が見落とされがちであると、本章では指摘されている。出稼ぎ先とケーララ社会を行き来するヒンドゥー教徒の移民労働者たちは、故地のローカルな神霊信仰ムタッパンを通じて故郷との関係を維持している。移民労働者が増え始めたころかから儀式の回数が増加した事実から、移民労働者がもたらすグローバルな資本が神霊信仰の強まりと結びついていることがわかる。また、生きがいを求めてこの祭儀を行っている側面も見受けられ、祭儀が故地との関係を維持するのみならず、移民社会を生きる生きがいにもなっていると考えられる。

以上に各章を紹介したが、本書が優れているのは、多様な事例を交えて湾岸アラブ諸国の移民労働者に光を当てている点にある。また、統計データやフィールドワークから得た知見をバランスよく組み合わせ、複

雑な現実を多元的に明らかにしている点が本書の良い点であろう。また、「差別」という視点ではなく、移民労働に関して論じる関係性の「分断」という概念で社会的な問題の質を明らかにしている点も注目に値する。本書が移民研究に資することは言うまでもなく、現在の湾岸アラブ諸国を理解するために非常に意義深い著作であるのみならず、地域間比較に基づくアジアの地域研究にも大きく貢献するものであろう。

本書からは、ディアスポラ・アフガニスタン人の研究をしている評者も非常に啓発されるところが多かった。アフガニスタンでは40年以上も続く戦乱のため、多くの人びとが国外に流出し、湾岸アラブ諸国でも約15万人のアフガニスタン人が労働している。また、他のイスラーム諸国に移住したアフガニスタン人もおり、彼らのネットワークがどのような実態を持っているのかについても、関心がもたれている。

地域研究は、それぞれの地域の実態を解明することに力を注ぐが、グローバル化時代の今日、それぞれの地域の出身者が世界に散らばって形成しているディアスポラ・コミュニティーの実態解明も重要な研究テーマであろう。本書のような研究がさらに発展することを願っている。

（桐原　翠　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

菊田悠『ウズベキスタンの聖者崇敬――陶器の町とポスト・ソヴィエト時代のイスラーム』風響社　2013年　396頁

ソビエト連邦が崩壊して今年で25年近くになる。かつて、ソ連時代ではソ連地域を対象とする人類学や宗教学などは非常に難しい研究であった。入国でさえ容易ではない西側の学者はもちろんのこと、ソ連内部の研究者も「宗教を阿片」と称し、民族主義をブルジョワ的なものと規定していたソ連公式イデオロギーの影響を受けざるを得なかったのである。その中で、イスラームもソ連内部では社会主義化によって徐々に消える前時代的後進性を示すものであったとされていたのであった。しかし、ペレストロイカの開始から現地の資料へのアクセスや現地調査が可能となって以降、旧ソ連圏に関する研究は格段に展望が開けてきた。こうした中旧ソ連圏を始めとして、東欧諸国やモンゴルなどを社会主義の経験を経た地域とみなし、伝統・社会主義・現代の三つの歴史的位相からその社会を分析していこうという「ポスト社会主義人類学」（p. 29–37）[1] が成立していくのである。

本書は、そのような「ポスト社会主義人類学」と、イスラーム圏のある地域を研究対象とする「イスラーム地域研究」の双方からのアプローチを試みた著書である。ウズベキスタンの地方都市で陶業を有力な産業として持つリシトンをフィールドとし、1980年代に提唱され今なお欧米で支持されている「並行イスラーム論」[2] に代わる新たな概念として「2つの原理と7つの核」を提示し、イスラーム的儀礼の観察を通じたウズベキスタンの人々のイスラーム信仰実践の分析、ソビエト的近代化（社会主義経験）と人々の信仰との関係といった2つの点を通じてウズベキスタンのイスラームの実態を明らかにするのが本書の目的である。

本書は序章と終章を含む10章から構成されている。その内容を概観していきたい。

本書の目次は以下のとおりである。

序章（本書の射程 / 調査の経緯と論文の構成）
●第Ⅰ部　フィールド紹介と分析の枠組み
1章　青い陶器の町リシトン
2章　ウズベキスタン・イスラームの分析枠組み

1）ポスト社会主義に関しては［佐々木 2003; 高倉・佐々木（編）2008］も詳しい。

2）［本書 p. 38］フランスの学者ベニグセンが1980年に発表した旧ソ連圏のイスラームをムスリム宗務局が頂点である政府公認のモスクとウラマー「公式イスラーム」とそれと並行して非公式に存在したスーフィズムなどを「並行イスラーム」に分けて考える分析概念。彼によれば、公認のイマームやモスクの数は少なく旧ソ連圏のイスラームへの影響力を乏しいものであり、宗務局に管理されていないスーフィズムを中心とした「並行イスラーム」こそがソ連イスラームの中心であったと言う。